



Title	デカルト哲学と第一原理
Author(s)	米虫, 正巳
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41201
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 こめ 米 むし 虫 まさ 正 み 巳

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 1 4 1 9 2 号

学 位 授 与 年 月 日 平 成 10 年 11 月 25 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第2項該当

学 位 論 文 名 デカルト哲学と第一原理

論文審査委員 (主査)
 教 授 山形 頼洋
 (副査)
 教 授 溝口 宏平 助教授 入江 幸男

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、序論、第1章「我在り」—デカルトにおける自己の存在、第2章 物的世界と日常的世界—デカルト哲学の二つの領域、第3章 デカルトにおける自己と他者、結論からなる。

第1章

デカルトが哲学の、あるいはむしろいっさいの学の第一原理として置いた我の存在とは正確には何を意味しているのか。この意味の再発掘は、デカルトの「連続創造説」と彼の実体の概念の分析を通して遂行される。連続創造説によれば、時間の諸瞬間は互いに独立であるから、任意の物が各瞬間ごとに保存されその存在が持続するためには、その物をまったく新しく創造する場合と同じだけの力が必要である。本論文はまず、連続創造説を神の存在証明や自然学との関連においてのみ考察してきたこれまでの定説を文献的に批判し、連続創造説がデカルト哲学全体を貫く根本思想の一つであることを明らかにする。次に、連続創造説そのものをデカルトの3つの持続（時間）の概念と関係づけて吟味し、連続創造説が実体の存在の持続に関わっていることを明確にする。そのうえで、論者は、この実体の存在の持続を、思惟実体である魂の持続の問題として位置づける。

これらの準備をしたのち、論者は、我の存在の非連続性と連続性が根本にあり、その上に神の存在証明に使われる連続創造説が成立しているのであって、その逆ではないと主張する。どのような意味で、我の存在の諸瞬間は独立的であり、また同時に連続的でもあるのか。この問いに答えるために、一方では、デカルトの実体概念が検討される。デカルトの完全な実体概念を表す思惟実体においては、実体性はその属性（思惟）に合致する。これが、私は思惟している間 (quamdiu) 存在するということによって、デカルトが意図している事態である。他方、デカルトの命題「魂は常に思惟する」が考察がなされ、その「常に」(semper) が実は「その都度に絶えず」(omnes vices) を意味し、「第2省察」で「我在り、我存在すという言明は、精神によって思い懐かれるたびごとに真である」と言われるときの、その「たびごとに (quoties)」と対応することが指摘される。このようにして、連続創造説と実体概念との新しい解釈を通して再発掘された我の存在は、完全に思惟に一致し、しかも、その思惟としての存在に対して我は根本的に受動

的で偶然的である。デカルトの自我は、世界を構成し支配する図式化された近代的自我とは一致しない。

第2章

自然学の対象である物体的延長の世界と実践的な日常の生の世界というデカルト哲学の二つの世界が論じられる。前者は魂と物体との実在的区別に基づく世界であり、後者は魂と物体との実体的合一に根拠づけられた世界である。この二つの世界はデカルトの体系において両立不可能の様相を呈するが、本論文は、デカルトの物体の定義において運動ないしは力の概念がどのような処遇を受けているかを検討することによって、二つの世界の矛盾を調停しようと試みる。魂と物体との分離によって成立する延長としての世界は、魂を知性に、物体を延長に切り詰める作業を通して実現される。その結果、運動が延長の様態として定義されるが、そのように定義された運動は、物体の位置の相対的な変化としての相対運動しか与えない。事実、延長と規定された物理的世界にデカルトは相対運動しか見ない。ところが、ベルクソンが指摘するように、デカルトにおいても、神は創造とともに、その動かす力によって世界に運動を与えたのであるから、物体全体としての世界は絶対運動をしていることになる。物体は運動とともに与えられる以上、物体の属性を延長に限定し、運動を、その延長が取ったり取らなかったりすることのできる様態とすることは、物体という実体の定義が不完全であることを示している。物体を延長の属性のみによって定義する限り、物体において実体は属性に対して超越した基体となる。デカルトの言明に反し、実体は属性からは知られず、実体は属性から離れてしまうことになる。本論文によれば、物体の本質は単に延長に尽きるのではなく、延長の様態に還元されない運動をも同時に含んでいる。物体を延長だけではなくその本質において運動においても規定されていると考えるとき、物体のその運動的本性において魂は物体と実体的結合を果たす。と言うのも、魂は神によって物体を動かす力を与えられているからであり、この魂の力に身体（物体）の運動性が不可分のものとして対応しているからである。

第3章

この章の前半は、デカルト哲学の最も厳密な論証の範囲内では他者の存在が証明されていないことを取り上げて、その事実が、デカルト哲学の欠陥ではなくて、積極的な側面をもつことを明らかにする。『省察』における他者に関する記述をつぶさに調べ、そこで問題となっているのが心身合一としての他者であることを明確にしたのち、その他者が魂と物体との実在的区別によって、精神と物体とに分解されていく過程を描き出す。心身合一態としての他者のこの解体は、自然科学の基礎付けを目指して物体を延長として規定しようとするデカルトの努力の代償である。その証拠に、『省察』の最後で、心身合一が事実として承認されたのちの場面で、他者が、「真の人間」(verus homo) が、論証抜きで、その意味で幽霊のように再登場する。自然科学の基礎付けのためには、心身合一としての他者は抹殺されなければならない。これが前半部の結論である。

この章の後半部は、デカルトにおいて、心身合一としての他者に先だって、よりいっそう根源的な他者経験が私の存在とともにすでに与えられている可能性を探る。デカルトの哲学の樹によれば、道徳は幹である自然学の一つの枝として帰結する。もし他者が心身合一態に限定されるならば、自然学はそのような他者の解体の上に成り立つ以上、自然学の後に来る道徳はもはや他者を話題としないことだろう。したがって、他者の存在は、心身合一態とは異なる仕方与えられているのでなければならない。そこでまず、端的に思惟実体である限りでの他者の存在の可能性が、思惟実体の複数性の可能性として、デカルトにおいても認められていることが確認される。しかし、それだけでは単なる可能性に留まっている。現実にも他者が存在することについての根源的な経験を、論者はさらに、我思う、我在りのコギトの経験の内に求める。この際、神の存在と他者存在とを関連づけるレヴィナス流の議論は、デカルトのテクニストに戻って、棄却される。

私の存在を確証するコギトの経験が、そのうちにいかにして他者の存在についての何らかの現実性をも同時に含むことができるのか。この問いに答えるために、論者は、自我の観念を問題にする。自我について媒介され反省された観念しか知らないガッサンディに対して、デカルトは、自己自身に働きかけて回転している独楽を例に出し、自己自身を無媒介に見ることで成立する自我の内的で直接的な認識の存在を認める。さらに、この独楽の例に、観念の形成

を蜜蠟が様々な形を受け取る時のその様に喩える別のデカルトの記述がつけ加えられ、魂が自己自身の運動を受動的に受け取ることにおいて自我の観念が形成されることが示される。こうして自我が思惟の働きを直接受容するところに根源的な自己認識が、すなわちコギトの経験が、成立するのであるが、独楽の例と蜜蠟の例が強調しているのは、自己の存在の覚知に基礎を置く自我の観念の与えられ方が、自我にとって絶対的に受動的であることである。と言うのも、独楽は別の力が働いて回転を与えられない限り回らないし、また、蜜蠟が自分の運動を受け取ることでも或る形を取るとしても、蜜蠟が運動するためには、外から別の力で蜜蠟が揺り動かされなければならないからである。自己の存在の経験は、その経験の内に、自己の存在の絶対的な受動性を自己の存在の絶対的な偶然性の経験として含んでいるが、その偶然性の経験こそ、思惟する我の内にある根源的な他者の経験を表している。

論文審査の結果の要旨

本論文の論題はそのどれをとっても、デカルト研究にとって、きわめて基本的な問題であり、その意味では周知の事柄である。しかし、その基本問題を、本論文は、斬新な手法で説明する。第1章の、連続創造説をエゴの存在に基礎づける試みは、新しい企てである。神の存在の証明に使われている連続創造説の真理性を保証しているのは、すでに発見されている自我の存在の確実さ以外にはあり得ないから、これは『省察』の論理的秩序から言っても正しい指摘であり、しかも、これまで見過ごされてきた点でもある。さらに、この企てを、従来のデカルト研究の盲点を突く実体概念についての分析が側面から支えている。第2章は、デカルトの哲学体系上の矛盾と考えられる心身合一の問題を論じて、延長の様態に還元されない運動がデカルトの物体の概念に含まれる可能性を明らかにし、物体のその運動性を魂の力に対応させる。その解決法は独創的である。第3章で、他者の存在を扱って、デカルト哲学における他者の不在の積極的な意味を論じるというのもまったく意表を突くアプローチであり、また、デカルトにおける他者の意味を心身合一態としての他者と、他の思惟実体とに区別した上での論の進め方も今までにない優れた着想である。

このように、本論文は、デカルト哲学の本質的な問題に正面から取り組み、しかもそれらの問題の解決のために新鮮な提案を行ったという点で、画期的な成果をあげていると判断する。これらの提案が、これからさまざまに、研究者の間で議論されることを望むが、その際の話題提供として、次ぎの3点を今から提示しておきたい。1) 延長に還元されない絶対運動を考えると、物体全体としての宇宙の絶対運動との比較で考えると、身体が物体でありながらも統一のあるひとつの全体をなすという事実が、重要となる。しかし、この事実と、身体が自ら動くということとは、どのように関係するのか。身体が自己運動するならば、身体を動かす魂の力は必要でなく、したがって、心身結合の根拠もなくなるのではないか。2) 思惟実体としての他者の存在を、我の存在の絶対的受動性・偶然性から導き出すとする論法は、その組立において、連続創造説を使った神の存在の第2証明と同じ構造をもつ。問題の他者がまさしく他の人間的思惟実体であって、神ではないと保証するものは何か。また、哲学の樹の比喻で幹が二つに分かれることになるのではないか。最後に、3) コギトとしての自我と観念（本有観念）としての自我との関係をどのようなものとするのか。

本論文は博士（文学）の学位を授与するに十分値すると本論文審査委員会は認める。